

-4. 学びの森の風景

学びの森の住人たち（6）

- 学校でもない学習塾でもない、
学びの森 という世界が投げかけるもの -

アウラ学びの森 北村真也



6. 支援って何だろう？

日常の子どもたちとのかかわりを通して、私たちはいろんなことを考え、また考えさせられています。教育という活動は、そんなインタラクティブなやり取りを媒介にして、日々その答えが更新されていく営みののだと思います。

不登校という課題を一つの社会現象としてとらえた時、そこには社会の多様化という背景を無視することはできません。子どもたち同士の関係、家族のあり方、地域のあり方がこの現代社会の動きの中で揺らぎつつあります。これまでの観念だけでは十分な理解が得られない場面が増えつつあるように思えるからです。だから私たちは、子どもたちに教育というフレームの中で関わり、また支援というフレームの中で行動しながらも、同時にそのあり方そのものを再帰的に問う必要があるように思うのです。そして、そんなことを私たちに考えさせてくれたきっかけとなった子どもがいました。それが中学1年生のY子です。

7人兄弟の2番目として大家族の中で育った彼女の切実な思いは、「できるだけ早く家を出て、一人で生きていきたい」ということでした。「企業に就職したくない」という彼女は、「技術や資格を身につけて一人でもできる仕事をしたい」、「将来、結婚はしたくないし、自分の家族も持ちたくない」とはっきり私たちに言っていました。そしてY子はそんな言動を支えるかのように、大変自律的に学習活動をこなしていました。それはまるで仕事のできる優秀な社員のよう、目の前におかれた自分自身の課題をキチンと整理しながら一つ一つ確実に片づけていくのです。

そんなY子に出会ったことで、私たちはあらためて「支援とは何か？」ということ突き付けられていきました。「一人で生きていきたい」と心から願いとでも自律的に生きようとしている彼女に、いったい私たちは何をすればいいのでしょうか？そんな根本的な問いを次第に私たちは抱くことになっていったのです。



電車に乗れなかったY子

私たちがY子と初めて出会ったとき、彼女はほとんど昼夜逆転の生活を送っているひきこもり状態でした。すべてはそこから始まりました。そして、たまたまお母さんの車の事故をきっかけとして、彼女は電車に乗ってアウラへとやってくるようになります。そこから彼女はどんどん変わり始めたのでした。

現在中学2年になるY子は、他人の目が怖くて電車に乗ることができませんでした。小学校で1年半の不登校経験を持つY子は、地元の公立中学校へ行くのが嫌で、私立中学校に入学しますが、そこも1ヶ月で通えなくなり、それから約1年間、家でひきこもり生活を送ることになりました。そして中学2年の5月にアウラを訪れ、通い始めるようになりました。両親とも共働きで、しかも奈良県との県境に住んでいたY子がアウラに通うには、どうしても電車に乗ってくる必要がありました。ところが、Y子はどうしても他人の視線が気になって電車に乗れません。そこでお母さんの仕事が休みの日だけ(月3回程度)、車

に乗せてもらって通っていました。

月に3回、しかも当時のY子の生活はかなり夜型になっていたため、朝は起きれない状態が続いていました。だからアウラには、いつも午後2時頃にやってきましたので、1日2時間の学習が精一杯、これでは、なかなか学習が前に進まないのが現実でした。ところが、8月にお母さんが車で事故をおこされ、幸い怪我はなかったものの車が廃車になるということがありました。Y子は、もうお母さんの車でアウラに通うことができなくなったのです。そして、それを機にY子は、9月から片道2時間の道のりを一人で電車とバスに乗りアウラに通うようになっていったのです。月に3回しか来れなかったY子が、週4日、毎日やってくるようになったのです。しかも、生活のリズムも徐々に朝方に移行していき、毎朝7時には起きて、午前中にアウラへとやってくるようになりました。そんなY子に、私はインタビューを試みました。

「Yちゃんにとって、アウラってどんなところがいいの？」

「…、そう、自分のペースで勉強できること。それに静かなところ」

「Yちゃん毎日、4時間も勉強ずっとやってるやん。しんどくない？」

「しんどくない。やっぱり自分のペースでやれるから、しんどくないんやと思う」

「自分のペースで学習できる」、「集中して勉強できる」。これは、Y子の他にも多くの生徒がアウラの気に入った点としてよく使う表現です。「家やったらできひんけど、アウラに来ると、なぜか勉強する気になってしまう」

こんなことを、言ってくる生徒も結構たくさんいるように思います。

「Yちゃんは、お母さんの車がつぶれたことをきっかけにして、自分で電車に乗って来れるようになったやん。このことって、すごく大きかったと思うんや。それからどんどんY子ちゃんは変わり始めて、朝も起きれるようになった。勉強もどんどん進められるようになった。それによくしゃべるようになった。で、僕が聞きたいのは、どうして急にどんどんいろんなことができるようになったかということ」

「確かにそれまでは、お母さんに送ってもらってた時でもアウラに行く前は、胸が痛くなって、ワーツという感じでとつてもしんどかった。でもそれがだんだん減ってきて...」

「なんで、減ってきたんやろ？」

「そうや、数学が楽しくなってきたからやわ。自分で勉強してると、数学が、だんだん面白くなってきて、それで、何か自信が持てるようになってきたんやと思う。それで、自分で電車に乗ってみると、案外大丈夫で、OKなんやと思えるようになってきた。それから、自信がだんだん大きくなってきた」

「胸がワーツって感じはどうなった？」

「もう大丈夫、今は全然大丈夫です」

Y子の変化は、実際大変大きなものでした。ひとつの籠が外れると次々とそれまで行き詰まっていたことが変化していきました。何がそうさせたのでしょうか。本人は「数学ができるようになったこと」と答えていましたが、確かに学習活動を介した 自信 は、彼女の生活を大きく変えるひとつの要因になりました

た。しかし、それだけではないように思います。彼女自身の中に 変容 への準備が整い、それがお母さんの車の廃車をきっかけにして、一気に動き出す。そんなことが起こったのだと思います。



わかってもらえなくても大丈夫

「わかってもらえなくても大丈夫」「私は一人で生きていきたいんです」と言われた時、私たちは目の前の子にどんな手を差し伸べればいいのか？ Y子との出会いは、私たちに「支援」そのものがいったい何なのかを、根本的に問いかけるきっかけになりました。

私はある時、ふと考え始めました。一人でいれることは、大きな能力かもしれない。そしてY子は、私以上にその能力を持っているのかもしれない。孤独をしっかり引き受けられる能力を...

私たちは、たった一人で生まれ、たった一人で死んでいきます。私たちの人生は、そんな時間軸の中の2つの点の間に彩られています。そして、この間に私たちは家族

と出会い、友と出会い、パートナーと出会い、自分の子どもたちと出会うのです。でもその終わりは、やはり一人ぼっちで迎えないければなりません。私たちは、たった一人で自分の死に向き合えるようになるためにいろいろな人たちに出会うのかもしれない。

そんな風に考えてみると、Y子はとても興味深い子どもに見えてきます。私は彼女と話しているうちに、次第にそう考えるようになっていきました。するとおもしろいことに彼女の中に少し変化が見られるようになっていきました。それは、今まで出会ったことのなかった私の対応に、彼女自身が揺らぎ始めた瞬間でもありました。

Y子は、毎日アウラに来て学んでいます。休みも遅刻もなく、毎日同じように淡々と学習の日々を送っています。ただ特徴的なのは、周りの子どもたちとほとんどコミュニケーションを取らないこと、周りに人がいようがいまいが、彼女は全く同じように学習を続けるのです。

普段はほとんど自分から話すことのないY子ですが、私の問いかけには、徐々に自分の考えや思いを話してくれるようになっていきました。そんなある日、塾生全員に向けたアンケートで、彼女は「アウラでの勉強と学校での勉強の違い」について、こんなことを書いていました。

学校『集団』『非効率的』。アウラ『個人』『効率的』。学校は大勢の生徒に対して1人の先生。どんなに気を配っても少しはムラがで

きる気がする。アウラはひとりひとりそれぞれ自分のペースで進め、分からないところがあったら先生に聞く。自分で十分理解できるところはどんどん進む。とっても効率的だと思います。学校だと自分が理解できていなくてもだいたいの子が理解出来ていたら進んでしまって、自分は結局きちんと理解できずに次の勉強に取り掛かる。逆に自分が理解出来ていても、だいたいの子が理解しきれていなかったら、また最初から説明しなおし、非効率的だと思います。

私はY子の出したアンケートを見て、少し驚きました。彼女は小さな回答欄に、その枠を超えて自分の思いを書いていたからです。この文章から、彼女が学校生活に満足できなかったこと、そしてアウラでの生活に満足している様子が伝わってきます。それと同時に私の頭の中にある思いがよぎりました。それは、Y子がいつも周りを気にせず一人で淡々と学習を続けることに、ある種の問題意識を持っていた私自身に対する疑問でした。

「Y子の行動は、問題の行動 だと言えるのだろうか？」

確かに、Y子は私たち教師とはコミュニケーションをとりますが、同世代の子どもたちとは自分から話しかけることはまずありません。しかし、お昼の時間や掃除の時間などの共同の時間には、一緒に行動をとっています。そこでの振る舞いも、ごく自然なものです。ただ、自分からは一切話そうとはしないのです。私は、最初の頃、「Tちゃんと1日1回は何か話そうに」なんて指示を出していたこともありましたが、本人が全く実行しなかつ

たので、それもやめてしまいました。そして、彼女の行動をじっと観察していくうちに、「一人でいれることも、また能力ではないか」という思いを抱き始めるようになっていきました。

「Y子ちゃんは、一人で勉強しても、大丈夫？」

「はい、全然大丈夫です」

「じゃあ、周りに人がいてのと、一人で勉強するのはどっちがいいの？」

「どっちも同じです」

「じゃあ、周りに人がいようがいまいが、Y子ちゃんにとっては同じということ？」

「はい、同じです」

Y子は、大変礼儀正しい口調で、私の問いかけに答えていました

「Y子ちゃんは、家でも一人での？」

「いいえ、私は5人兄弟なんで、なかなか家では一人であることができないんです」

「一人でいることは好きなの？」

「はい、好きです。自分の時間が、落ち着くんです」

「アウラでの勉強はどう？」

「家では、落ち着いて勉強できないから、ここでの時間がとっても気に入っています」

「Y子ちゃんは、来年3年になるけれど、高校は行きたいの？」

「一応、行こうと思ってるんですが、何か通い続けていく自信がなくて…。それやったら、通信制に行ったら昼間はアルバイトしようかなあとも思うんです」

Y子は、兄弟が多いので家計の負担を気にしている様子でした。

「僕は、通信制の高校より全日制の高校へ行く方がいいように思う。Y子ちゃんは、小学校でも不登校になり、地元の中学がいやで私立の中学に入学したけど、1ヶ月でまた行けなくなった。今まで2回学校生活につまづいてきたわけや。だから不安なのはよくわかる。でもだからこそ、これを乗り越えてほしい。“学校でも私は大丈夫って”思えるようになってほしい。高校に入ることより、“私、大丈夫”って思えることがY子ちゃんにとって大きな意味があると思う。だから、全日制の学校へ行くのがいいと思うんや。それでも、もし高校に行って途中でダメになることがあっても、またアウラに戻って勉強すればいい。僕の言っている意味、わかるか？」

「はい、よくわかります」

Y子は、そういつうなずいていました。

Y子は、かつて「私は、結婚したくないけど、子どもは欲しい」「早く家を出て、自立したい」というような話をしたことがありました。そして「自立していくためにも、仕事が必要だし、そのためには、他人ともうまくやっていけるだけの術を身につけなければならない」ということも話していました。まだ中学2年生の女の子ですが、彼女なりにいろんなことを考えているようでした。それは将来のことだけでなく、自分自身のことについてもよく理解しているように感じられました。私は、そんなY子にこんな質問をしたことがあります。

「Y子ちゃん、Y子ちゃんのことをよく理解してくれた先生って今までいた？」

「ううん、先生はいつも“あなたは、こうでしょう”って言ってたけど、それってみんな

な違っていた。でも、説明してもどうせわかってこないだろうから、いつも適当に返事をしてきた」

「そうなんや、じゃあ家族はどう？」

「家族もあんまりわかってないかも...、でも下の妹は少しくらいわかっているかな」

「じゃあ、カウンセラーの先生は？」

「そんな話、したことない」

「ふーん、そしたら、こんなこと僕と話すのは、ほとんど奇跡みたいな状況なんや」

「はい、そう思います。先生とは、なんでか知らんけど話せてしまう」

「僕はY子ちゃんのこと、かなりわかっている？」

「うん、そう思います」

「でも、なぜ僕はY子ちゃんのことわかってるって、思うんやろ。他の人と何がどう違うんやろ？」

「.....」

「ひょっとしたら、僕は、Y子ちゃんという人間に興味があるのかもしれない。僕は一人になることは基本的にいやだと思っている人間だと思う。一人の時間は嫌いではないけど、ずっと一人はいやなんや。でもY子ちゃんは違う。ある意味、僕と対照的な存在かもしれない。だからもっと知りたいと思ってきたのかもしれない」

「ふーん。そうなんですか...」

「きっとそうだと思う。Y子ちゃんが学校の先生に違和感を感じたのは、Y子ちゃん自身を普通の子の型にあてはめようとしたのかもしれないな。でも僕は僕とタイプの違うY子ちゃんを知りたいと思ってきた。そう思いながら、いろんな質問をしてきたんだと思う。だから答えやすかったんじゃない？」

「うん、そう思います」

「そうしたら、ひょっとして僕がY子ちゃんの初めての理解者になるかもしれんな」

そう言うと、Y子は、クスッと笑っていた。

Y子は、今まで自分をわかってくれる人なんていないと感じてきたのかもしれない。それは、家族も例外ではありませんでした。Y子はいつも友達に合わせて学校生活を送り、家族に合わせて家庭生活を送っていたのかもしれない。どこか相手と関わりながらもある距離感を保っていたのかもしれない。だから彼女は孤独を愛するようになっていったのでしょうか。そんな彼女をありのまま受け入れていくことで、何らかの動きが生じていくように思います。これからどのような変容を遂げていくのか、私は楽しみにしています。



ひとりであるということ

「不登校の子どもたちへの支援」という表現を私たちは何気なく使います。でも支援は、目の前の相手への「理解」を前提にしないと成り立つものではありません。もし相手を理解することなしに支援をおこな

ったならば、それは支援という名を借りた押し付けにすぎないのかもしれませんが。

では「理解」とは何でしょう？相手を理解するという事は、いったいどういうことなのでしょう？これはとても一言では表現しきれない大きな問いです。ただ私がY子とのやり取りを通して感じ取った一つの答えは、「彼女の視点を手に入れる」ということだったのかもしれませんが。彼女の眼に、いったいどんな世界が映っていたのか、それをいかにして共有できるのかということだったように思います。そのためには、私の中にそれまで当然のように思っていた考え方を、もう一度振り返ってみる必要があったのだと思います。そうしないと、Y子の視点に立つことができなかつた。彼女の眼に映し出された世界が見つけれなかつたのだと思うのです。

「ひとりであることが好き」というY子は、今日も黙々と自分の学習をこなしています。自分で解説を読み、演習をこなし、答えを確認する。その学習活動は、とても自律的であり、しかも正確です。昼休みは、黙って本を読み、みんなでおこなう掃除の時間もとても丁寧に作業をこなしています。そういう意味では、彼女は模範的な中学生なのです。違いがあるとすれば、唯一いつもひとりであることです。

「Y子ちゃんは、この前ひとりでいることが好きだっていったでしょ。もう少し、聞いてもいい？」

「はい」

「Y子ちゃんのこと、家族の中でわかって

る人いないっていったけど、それはさびしいことじゃないの？」

「いいえ、全然」

「じゃあ、たとえば国がもしY子ちゃんの生活を保障してあげるっていったら、Y子ちゃんはすぐにでも家を出て一人で暮らしたい？」

「うん、そうしたいと思う」

「そうなんや...、それってすごいなあって、思う」

私は、Y子の返事に少し戸惑いを持ちました。

彼女にとって家族って何なのでしょう？ただ働けないY子の生活を経済的に保障するだけのものなのでしょう？

これって、家族の問題なのでしょう？

それともY子の問題なのでしょう？

あるいは、問題なんて何も無いのでしょうか？

Y子は、私たちよりもずっと成熟した側面を持っているのでしょうか？

私の中で、いくつもの疑問がわいてきます。

私は、かつてY子の在籍校の先生に彼女の様子を話したことがありました。しかし、その先生は彼女のそんな側面を「問題」として捉えようとしてました。「これが、Y子の先生嫌いの原因かもしれない」と私は直感的に感じて、もうそれ以上話すことをやめました。少し、Y子の気持ちがわかったかもしれませんが。

私たちは「ひとりである」ということを本当に引き受けているのでしょうか？

私は、なかなか「はい」という自信がありません。高校生の時にフロムの『愛するとい

うこと』を読んで、他人を愛するための条件として、ひとりである ことの受容ということが挙げられていたことに、まだまだ本当に他人を愛することなんて無理かもしれないと思った記憶がよみがえってきます。そう考えるとY子は、わたしたちよりずっと大人なのかもしれない。だからまずこのY子の持つ側面を、すごいことだと受け入れることから始めなければならない。彼女は、この側面を誰からも理解されることなく、しかも問題として捉えられて育ってきたのかもしれない。だから、他者に対してあきらめにも似た感情を抱きながら、適当に合わせてきたのかもしれない。そうすると、他人にあわせる自分と本当の自分とのなかにある種の乖離が生じ、彼女は常に不安定な状態をおくることになったのだろう。そして、思春期に入って何かの対人関係のトラブルが引き金になり、彼女は自分自身を閉ざしてしまったのかもしれない。

ひとりであることの受容 = 大人になること そう考えると、Y子の心の中には、数多くの葛藤が経験されているのかもしれない。その心のひだにしまわれた経験を一つ一つひもとき、共有していくことで彼女は、もっと成長していくのかもしれない。彼女の変容は、私自身の変容を伴いながらともに 大人への階段 を昇っていくことになるのだろうか？



ひとりであることをめぐって

アウラに学ぶ不登校の子どもたちのうち小中学生は、それぞれ学校に籍を置いています。ここでいう学校の多くは、それぞれの住所地にある公立学校です。だから彼らは、学籍をその学校においたまま、アウラで学習活動を行っているわけです。そして私たちは、その在籍校と常に連携をとるようにしています。ちょうど不登校の子どもたちを中心に据えてそれぞれがサポートできる体制をとっているのです。しかし、「ひとりがいい」というY子にとって集団性を重んじる学校はあまり居心地のいい環境ではありませんでした。そこに彼女の大きな葛藤があったのです。

Y子は、その日初めてたった一人で在籍校に足を踏み入れ、学年末考査を受験しました。1年前までほとんど家から出ることもなかったY子ですが、アウラに自分で通い始め、毎日学習活動が続ける中で彼女なりの自信を取り戻し、今まで誰にも話しをすることのなかった自分自身を表現するようになって、今日のテストの受験へとつながったのだと思います。

す。

そんなY子がテストを学校で受験している間に、在籍校の校長先生がアウラに訪ねてこられました。学校とはこれまでも何度か情報を交流させてきたので、私も安心してY子の状況をお話することができました。

「いつもお世話になり、ありがとうございます。今回、Yさんが学年末考査を受験できるようになったのも、アウラで丁寧に指導いただいているからだと思っています。1年前は、名簿にも名前を記載しないでほしい。家庭訪問もしてほしくない。と、学校からすれば、手も足も出せない達磨状態だったのですが、アウラに通い始めてからは、どんどん本人も力をつけはじめ、テストまで受験できるようになったのですから、本当にすごいことだと思っています」

「そうですね。本当にY子ちゃんは変わりました。ずいぶん力強くなってきたと思います。毎日あの子は、淡々と自分の生活を送っています。その根底には ひとりである ことを引き受ける力があるんだと思います」

「ひとりであることを引き受ける力とは？」

「以前にも、学年主任の先生には少し電話でお話したんですが、彼女は“ひとりであることが一番好き”っていうんです。そしてそのことを小学校の高学年頃から自覚するようになっていったんです。小学校の先生は、Y子が孤立しないようにといろいろ配慮をしたのですが、それはY子から見ると余計なお世話で、そっとしてほしかった。彼女から言わせれば、学校の先生の彼女への理解はほとんどの外れで、本当の気持ちを話しても理解

してもらえなかった。そしてそのうち、理解してもらおうという気持ちがなくなっていったそうです」

「よくわかりません...、彼女は孤立してひとりであることを望んでいるんですか？」

校長先生は、私の話すことがよく理解できないようでした。その理由は簡単です。先生にとっては、ひとりであること = 孤立であり、そこにはネガティブな意味づけがあるからです。学校管理者としては、生徒が孤立することは防がなければならないことなのです。ここに学校の先生とY子との ひとりであること をめぐる認識の違いがあります。学校には学校独特のフレームがあるのです。そしてそのフレームを通してY子を見つめると、彼女はいつも 問題を抱えた子ども であり、生徒指導の対象となるのです。実は、Y子自身もこのフレームの違いに戸惑いを持ってきたのかもしれませんが。

Y子の様子を観察すると、彼女はとても自律的な子どもであることがわかります。それは学習面だけではなく、生活全般にも言えることでした。お母さんの話によると、彼女は小さい頃から大変手のかからない子どもだったそうです。7人兄弟の2番目という立場から、彼女は周りの手を煩わさないことに価値を見出してきたのかもしれませんが。何でもひとりでやり遂げようと無意識に行動をとってきたのかもしれませんが。

そんなY子が思春期に差し掛かる小学校高学年の頃、彼女は人間関係の難しさに直面します。本来 ひとりである ことを好んでいた彼女でしたが、周りがグループを構成する

ようになると彼女も否応なく、どこかに属さなければならなくなりました。そして自分が望んでいなくても周りに合わせるが多くなり、彼女はしだいにストレスを感じる機会が増えていきました。そんなある時、彼女は友達関係の中で ひとりである ことを選びます。そしてそのことがきっかけとなって、彼女はクラスの中で孤立することになり、次第に学校を休むようになっていったのです。

私はY子を通して ひとりである ことをあらためて考えてみたいと思うようになりました。彼女を 問題を抱えた子 と捉えるのではなく、ひとりである ことを引き受けられる自律的な子どもと捉えることで、Y子の違った側面が見えてくるように思ったからです。彼女は、小学校高学年頃から自分自身を表現することにためらいを覚えるようになっていきます。それは彼女が「自分を理解してくれる人なんていない」と思うようになっていったからです。「家族さえ、私のことを理解してない」と言い切るY子のその心のひだに私自身が触れてみたいと思うようになっていったのです。

「私はY子と話しているうちに、“すごいな”と思うようになっていったんです。まず彼女は14歳でありながら ひとりである ことをしっかり受け止められる子どもだと思うんです。私も、今までかなり子どもたちに出会ってきましたが、その中でもY子のような静かな強さを感じる子どもはなかったように思います。それでいて、彼女は決して孤立しているわけではありません。自分自身を閉ざすのではなく、私ともこんな話をするんですから…。つまり、彼女を問題の子どもとし

て捉えるのではなく、自律的な子どもとして捉えなおしたとき、彼女は私に自分の心の内を話してくれるようになった。だからこそ、彼女をある固定されたフレームの中に押しとどめるのではなく、彼女は彼女のままでありながら、周りとの関係を構築していけるようになれば私は考えているんです」

「なるほど、そうかもしれません。なかなか、そこまでの対応や考えは、現場の教師にはできません。先生であるからこそできるのかもしれない。いい勉強になりました。そして、今後Y子さんの対応を学校としてどう捉えて、どうサポートするのか、学校に持ち帰って考えてみたいと思います」

「ありがとうございます。先生にご理解いただいて大変うれしいです」

「いやこちらの方こそ」

こうして、校長先生との話は終わりました。Y子のことを通して、私はあらためて ひとりである ことを見つめ直し、私とY子との関係性を通して、校長先生は学校としてのY子への関わりを見つめ直そうとしています。思い返せば、こうして一人一人の子どもたちから、私は多くの宿題をもらいながら、その教育を考えてきたのかもしれないと、あらためて感じさせられました。



話さないという関係

「話さないという関係」があるということ、私たちはY子から学びました。たとえそこにコトバが介在しなくても、確実にそこにある種の関係が芽生えます。コトバ少ない彼女でしたが、私たち、そして一緒に学ぶ仲間たちとの間で、何かを確実に得ていたのかもしれませんが。

「T子が定期試験を受験したため、今日はY子が一人で学習をしていました。そんな時、メール便が届き、Y子が先日受験した定期テストが学校から届きました。Y子の結果は、全教科平均以上、中には9割近くの点数もありました。生まれて初めて受験した定期テスト、しかも授業を一切受けていない状態ですから、この結果に私は大変満足しました。

「Y子ちゃん、すごいやん。大したもんや」
私のそんな言葉かけに、彼女はうれしそうに微笑んでいました。

たまたまその日の午前中は、Y子と私の二人だったこともあり、私はT子との関係について彼女に質問を投げかけました。

「Y子ちゃん、Y子ちゃんにとってT子ちゃんは、どんな存在？」

「……」

しばらく私は彼女の返事を待ちましたが、彼女は首をかしげたままでした。

「じゃあ、質問を変えよう。Y子ちゃんは、

T子ちゃんと全然話そうとはしないけど、T子ちゃんがいてくれるのと、いてくれないのとでは、違いがある？それとも、いてもいなくても同じ？」

「……、いてくれた方が、いいかな？」

「じゃあ、いてくれるのといてくれないのとでは、どんな違いがあるんやろ？」

「……」

Y子は、言語化できないようです。

「それじゃ、今度は僕のことを考えてみて。Y子ちゃんは、いつもほとんど質問することなしにひとりで勉強しているだろ。僕は、自分の机で自分の仕事をしている。同じ部屋にいるけれども、ほとんど会話はしない。Y子ちゃんにとって、僕が同じ部屋にいて勉強するのと、僕がいなくてたった一人で勉強するのとでは、違いがある？」

「はい、全然違うと思います」

こんどは、Y子は瞬時に返事を返しました。

「今度は、すぐに返事が返ってきたね。じゃあ、どう違うんだろう？」

「うーん、……」

この質問は、なかなか難しいようです。

「Y子ちゃんは、あまり他の人と話そうとはしない。今まで学校の先生たちは、それをきくと 問題 とみとみてきたんだと思うんだ。でも僕は、そうは思わない。話さない関係 だってあると思うんだ。たとえ仲良しそうに話していても、陰で悪口を言う関係だってあるように、話をしなくたっていい関係だってある。Y子ちゃんは、あまり人とはなさいけれど、僕はY子ちゃんなりに関係を持っているように思うんだ。だから、それがどんな関係なのかを知りたいって思うんだ」

「なるほど」

Y子は、私の話にならずにいました。

Y子が私と話すときは、決して多くを語ろうとはしません。彼女の言葉数は多くはないのです。そればかりか、返事が返ってくるまで大変時間がかかります。それは、彼女が言葉を紡ぎだす時間であって、自分の思いを言語化するのにかかる時間のように思います。それが彼女のリズムなのかもしれません。彼女の内面にある言葉にならない思いを、私は押し量りながら質問をし、彼女はその言葉にならない思いを言語化しようとするのです。

「私は一人の方が、気を遣わなくて楽、でも先生がいてくれることで、とっても安心する」

これがY子の思いでした。

「安心するって、質問できるからって意味？」

「それだけじゃなくって、具体的じゃない安心っていうか...、なんかそんな感じ」

Y子は、私との関係の中で、話さない関係があることを自覚したように思います。話しているから関係があるのではなく、話しているように、話してしまいが、関係があるところには、関係があるのです。そしてこの関係は、彼女に 安心 を与えます。ひょっとすると、Y子にとってT子の存在も、この 安心 を提供してくれるものかもしれません。ただいまのY子にとって、そのことは自覚できていないのかもしれません。ただT子との関係を私との関係の中に投影してみることで、新たな認識が生まれるのかもしれません。



ひとりで生きていくために

アウラの日常の中で生きているY子。それはいつも淡々と流れる日々。でもその時間の流れの中でも、彼女は少しずつ変化していきます。ある時、彼女のコトバが増えていることに気づきました。これまでは、黙っていることが多かった彼女ですが、今では自分の意志をコトバで表現しようとしてくれます。ひとりで生きていくためには、自分自身をどこかで表現していかないと誰も自分の存在に気づいてくれないということを感じ取ってくれたのかもしれません。

その日もY子は、黙々と中間テストに向けた学習に取り組んでいました。自分でテスト範囲を確認し、それに向けた学習計画をたて、やるべき課題とまだやらなくていい課題とを選別し、そこに優先順位をつけ、しっかりとその準備に取り掛かります。今日も学校から送られてきたプリントの束を、彼女は見ごとに整理しながら、ファイリングしていました。「こんな子だったら、仕事をまかせても安心できるなあ」Y子は、私にそんな思いを抱かせる女の子です。

1 学期も折り返し地点が過ぎ、Y子も、進路を具体的に考えないといけない時期に来ています。学力的には、平均以上のランクの全日制高校への進学を十分考えられるのですが、ひとりであることをことのほか愛してやまない彼女は、どうしても全日制高校へは行きたくないようです。

「Y子ちゃん、進路のこと考えた？」

「……」

「家の人は、どんな風に言ってるの？」

「私立は、無理って…」

「じゃ、公立高校？」

「……」

どうしても、自分の進路のことになると黙ってしまいます。

Y子の場合、どの高校がいいのかということよりも、まずどうすればひとりで生きていけるようになるのかを考えるべきなのかもしれません。とにかく「ひとりがいい」というY子。「家が嫌」というわけではないのですが、「早く家を出てひとり暮らしをしたい」というY子。そんなY子を 問題を抱えた子どもとして捉えてきた大人たち。そのままざしを、彼女は敏感に感じながら自分の中に取り込んでいったのかもしれない。そしてY子は、小5からしだいに自分自身の殻の中に閉じこもるようになっていきました。

「Y子ちゃんは、ひとりで生活できるようになりたいんだ」

「はい」

「でも、今すぐは無理でしょう。生活していくためには、自分で働かないといけないし、

そのためには何らかの能力や、技術を身につけないといけない。どうしたらいいかなあ？」

「……」

「だからY子ちゃんの場合は、ひとりで生きていけるようになるために、どんな進路が考えられるかということかもしれないな」

「はい」

「例えばどんなことをして、生きていきたいって思うの？」

「パソコンでイラストを書いたり、ホームページのデザインをしたり…」

「ということは、自分の部屋でできる仕事がいいんや」

「はい」

「そしたら、そういうイラストとかデザインとかの腕を身につけないといけないかもね。なかなかひとりで生きていくのも楽じゃない。まず、Y子ちゃんが自分のできる技術を磨いて、それを外に向かってアピールしないとイケない。そうしないと、Y子ちゃんがそんな技術を持っていることが、誰にもわからない」

「なるほど」

「だから、腕をいかにして磨くか、そしてそれをどうやって他人に伝えるか、それをクリアしないとひとりで生きていくのは難しい。あの、アナウンサーでもフリーの人っているでしょ。彼女たちは、みんなそうして自分を売り込んで生きている。Y子ちゃんだって同じ、黙っていたら誰も気づいてくれない。そうしたら、なかなかひとりで生きていけるだけの仕事を手に入れられない」

「それで、進路はどう考えていこう？」

「わたし的には、通信制の高校に籍を置いて、昼間はアルバイトをする」

「どんなアルバイトならできるの？」

「工場とかの、作業」

「なるほど、誰かと対面なくていい仕事か...」

「でも、それで高校は卒業できるかもしれないけど、どこで技術を身につけるの？ひとりで生きていくためには腕を磨かないといけないからなあ...」

「そうですね」

「そう思うよ」

Y子がこれからどんな人生を歩んでいくのか、それは私たちにはわかりません。ただ、この思春期の真ただ中のごく限られた期間の中で、ある時間を共有し、そこで何かを感じ、何かを考えていったという事実こそが、Y子自身にとってそして私たち自身にとっても、大きな意味を持つことになったのだと思います。

私たちの考える「支援」というのは、「双方向の学びあい」を指しているのかもしれませんが、「支援をする側」「支援をされる側」という枠組みの設定はあるのかもしれませんが、そこに「理解」という要素が入ると、それは「学びあい」という状況を作り出すように思います。私たちはY子の支援をしながら、確実に彼女から多くのことを学んだのかもしれませんが。

